

# サンダル履きまま旅 8

◇ まったく変わったカンボジア ◇

## 寺井融

*Terai Toru*

活気づくプノンペン市内  
経済使節団と豪華ホテル

久しぶりに、カンボジアに行ってきた。四回目の訪問である。

一言でいったなら、まったく変わっていた。大変活気が出てきている。プノンペン市内には、韓国企業がビルを建てている。進出企業が相次いでいるからだ。中国やベトナムの最低賃金が上がったためらしい。中心部のホテルの部屋が、取りにくい。ラオスも同様で、経済視察団ラッシュとき

く。  
一九八二年のときは、タケオのPKO駐屯地に出向いて、自衛隊の派遣部隊を激励した。日帰り

で、アンコールワット見学にも行く。飛行機の座席は、自由席である。シエムリアップから、王国カンボジア航空のプノンペン行きに乗ろうとしたら、最後にわが団の二人があぶれてしまい、トイレで立ったまま乗って、帰ったことを思い出す。立ち席飛行機というものもある。素朴な田舎の停車場みたいな、飛行場が印象的であった。ところが今回、降り立ってみて驚いた。校倉づくりに似た、高床式風の東南アジア情緒あふれるターミナルビルに替わっていた。リゾートホテルみたいでもあった。

空港から中心街への道路の左右には四つ星、五つ星クラスの豪華ホテルが、軒を連ねている。町には、スーパーマーケットも入った大型

ショッピングモールも、二軒できていた。二十四時間営業のコンビニもあり、赤いきつねや出前一丁も、売られている。  
ショッピングモールは、夜九時まで開いていた。子供たちの楽しみは、エスカレーターに乗ることと、アイスクリームを食べることであるらしい。老若男女を問わず、憩いの場になっているようであった。



セントラルマーケット（プノンペン）

## 経済はドル通貨圏に 観光客一位は韓国人

支払いはドルである。レジの上段がドル、下段が現地通貨のリエルで表示されている。ちなみに1米ドル約四千百リエルだとか。百ドル両替したら、ラオスをはじめとする発展途上国のように、レンガ一個分ぐらいの厚さになるのではないのか。

内戦終了後、カンボジアは経済的に自立できるのか。タイのバツ通貨圏となるか、ベトナムのドン通貨圏になるのではないかと、懸念されていたのだが、実際はドル通貨圏となっていたようである。

ところで、リエル札はどこで印刷されているの



アンコールトム遺跡 (シャムリアップ)

か。

お隣のベトナムのドン札は、オーストラリアで印刷されている。昔のカンボジア紙幣は、ソ連で作られていたとも聞く。お札の印刷は複雑である。高い印刷技術が要求されるのだ。「それなら、北朝鮮がふさわしいよ」と言った友がいる。「人件費は安いし、偽札づくりで技術力は高いだろうから」だって…。迷案かもしれない。

現在のところ、カンボジアへの直行便がない。タイかベトナムで乗り換える人が多い。成田の発着枠が増えると、たぶん直行便が就航するであろう。

そうだとしても、行き先は果たして首都プノンペンとなるのか。かつてはまずプノンペン入りをし、その後、アンコールワットがあるシムリアップを目指していたのだが…。

二〇〇七年、アンコールワットを訪れた観光客の第一位は韓国人で、二位は日本人、三位は中国人だ、という話を聞いた。もし、本当なら、様変わりしたものだ。かつては欧米人がもっと多かった気がする。

### 見所多いプノンペン 栄光偲ばれる王宮に博物館

プノンペンを訪れる観光客が少ない。最大の観光地アンコールワットには、プノンペンを経由せずに、バンコクやホーチミンなどから、直接入れ



遺跡から夕陽を見にきた観光客と地元の人たち(シャムリアップにて)

るようになったからである。

といつても、さすがに首都である。実は見所が多い。まず王宮が一般に開かれている。専属の日本語ガイドがいるから、案内を頼んだらよい。有料だろうが、それほど高くない筈。

さらに、博物館では、かつてのクメール帝国の歴史と文化が分かり、版図がいまのタイから南ベトナムまで及んでいた、過去の栄光が偲ばれる。

現在、タイとの間では、世界遺産のヒンズー教寺院「プレアピヒア」周辺の帰属をめぐって、両

国軍隊が対峙し、小競り合的な戦闘で、死傷者も出ており、緊張が続いている。

さらに、ベトナムとの間では「彼らはするいですよ。気がついたらどんどん入ってくる。いまの政権は、ベトナムに甘い」と批判する人もいる。隣国との関係は、ご多聞にもれず、どこも芳しくないのだ。

## ボル・ポト派退けた現政権 二人の日本人慰霊碑に献花

現在、政権を握っているカンボジア人民党は、一九七九年にベトナムの後押しで、当時、国土のほぼ全土を支配していたボル・ポト派に闘いを挑み、退けた歴史を持つ。

「ボル・ポト派をやっつけてくれたのには、感謝しています。でも、それからずっと政権を握っているんですからねえ」と街の声。

明らかに、厭きがきているのだ。地方都市に行



中田厚仁さん慰霊碑

くと、見かけるポスターはヘム・サムリン下院議長（人民党名誉党首）、チャ・シム上院議長（人民党党首）、フンセン首相の三人が一緒に写っているものばかりである。ほかの党のポスターは見るとはまずまない。

プノンペン市内では、それすらも見かけない。セントラルマーケットやロシアマーケット、それにボル・ポト派の暴虐ぶりが分かるトゥールスレン博物館などには、観光客が多い。

日本人観光客なら、行ってほしいのは、二箇所の慰霊碑である。市中心部のウナロム寺裏手に、国連選挙監視団のボランティアであった中田厚仁さん、プノンペン空港近くの墓地には、文民警察の高田晴行警部補と、それぞれの碑がある。

「献花される人も、お線香をあげる人も、ほとんどいませぬね」と、在プノンペンの邦人は語っていた。「マーケットで買いためた、花を捧げてくださいました」というと、感謝された。かの国の無名戦士の墓に参って、自国の犠牲者に誠に捧げないのは、礼に失すると考えるからである。

## 保養地シアヌーク・ビル

### 美味だった海鮮中華

車で国道1号線を下ったことがある。自衛隊のPKOが駐屯したタケオを過ぎ、目的地シアヌーク・ビルの手前で、ガイド氏が前方の山を指差す。「シアヌーク・ビルから、あの山のあたりに連れ

てこられたのです。父と兄は家族から離され、殺されました。私は十五歳だったのですが、身体が小さかったので、十三歳と偽って助かりました」と涙ぐむ。

そういえばシエムリアップでは、ガイド嬢が「母の兄も弟も殺されました。父は、高校でフランス語の教師をしておりましたが、フランス語の教科書は土に埋め、かけていた眼鏡も隠して、農民ですといつて、生き延びてきたそうです」と語っていた。いまだ爪痕は大きい。

シアヌーク・ビルは保養地で、白い砂浜がまぶしかった。入った食堂では、海鮮中華をいただく。新鮮で火の通りもよく、美味である。シアヌーク前国王、モニク妃、シハモニ現国王と、お三方の写真が飾られていた。

もつとお薦めが、プノンペンのフランス料理である。シックで落ち着いたレストランに、洗練されたウエートレス。焼きたての硬いパンに白身魚のソテー、赤ワインがこたえられなかった。ミツシユランの一つ星店で修行した日本人シェフの店だという。ランチが十八ドルであった。

■てらいとおる 昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。